

海を照らす灯台のなかまたち

～堂埼灯台（どうさきとうだい）～

堂埼灯台は、宇和海・宇和島湾から宇和島港へ至る2つの航路のうち、南側の航路を示す標識で、1949年（昭和24年）12月に設置され、宇和島海上保安部管内では4番目に古い航路標識です。

（北側の航路は、同様の目的を「引出鼻灯台」が担っています）



設置当初の構造等は資料を見つけることはできませんでしたが、「1950年（昭和25年）、赤色木柱5メートル、不動赤光200ワット電球」の記録が残っており、1953年（昭和28年）には赤

色、円形、コンクリート造りに改築されていて、この塗色等からも分かるとおりに、宇和島港へ出入りするための右舷標識の機能を有していました。



【堂埼灯台沖から宇和島港方向を望む】

1987年（昭和62年）、赤色に塗装された外壁モルタルを白色タイルに張替えて現在の姿となっていますが、この頃、宇和海の浮標式変更（灯浮標、灯標等に世界的統一ルールを導入）が行われており、同灯台の塗色もこれらに合わせて変更されたものと思われます。



【灯台全景】

灯台の基礎部分には、今も辛うじて赤色塗料が残っていますので、訪れた際には確認してみてください。



【赤色塗料が僅かに残る基礎部】

灯台へはお寺（観音寺）の境内を通っていきます。



【観音寺の山門】

ここには、悲しい平家落武者伝説が残っています。

源平合戦・壇ノ浦の戦いの後、平家の幼い公達と5人の官女が、堂崎のお堂の天井裏に隠れていたところ、官女が身に着けていた紅の布が見えたため、お堂で食事を取っていた源氏の武士に見つかって

しまい、死を覚悟した官女は武士に噛みついたのですが、無念にも斬られてしまいました。

この若き女性を、村人は「袖様」、「小袖姫様」と呼び、今も観音寺の池の傍らの祠に祀られています。

堂崎の向かい側にある小高島には平家の武士が隠れていましたが、源氏はこれらを誘き寄せるため、堂崎下の岩上で残った官女4人を次々と斬ります。

平家の武士は無念の涙を流し、刀を口に咥え、堂崎を目指して泳ぎました。

この時の源氏の武将、五郎吉武は、泳ぎ来る者の先頭に、過去に命を救われたことのある平家武将、山名三郎幸兼の姿を見つけます。

五郎吉武は配下に「矢を向けるな」と下知しますが、誰かが放った矢が幸兼の急所を貫きました。

ここで亡くなった武士・公達・官女を供養するため、五郎吉武は生涯を堂崎で過ごしたそうです。

○堂埼灯台要項

所在地 愛媛県宇和島市（堂埼）

塗色・構造 白色、塔形（コンクリート造）

灯 質 単せん白光 毎4秒に1せん光

光達距離 7.5海里（約13.9km）

高 さ 地上から構造物の頂部まで 7.84m

平均水面上から灯火まで 28.67m

地上から灯火まで 7.70m